茨城県立図書館ボランティア会通信紙

カガヤキ

暫定的補足表題「ウオランタス」
ラテン語でボランティアの意

No.76(2024.7.15 刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

特集 1 茨城県立図書館と学校での経験

人と交わる

坂東市立岩井第一小学校校長
鈴木忠雄

桜がちょうど満開となった４月１日、茨城県立図書館（以下図書館）で２年間の勤務を終えた私は、本来の立場である教育現場へ戻りました。図書館での勤務は、教員が多様な勤務を経験するために行われるものです。教育委員会や図書館のような出先機関にお世話になりながら、様々な仕事、関係者や利用者にふれ、自分の見識や経験を高めます。今思うと２年前、自分は何をするのだろうかと、おどおどしながら赴任してきましたが、こんなに充実し、早く過ぎた経験はなかったと思います。それほど図書館の仕事は楽しく、やりがいがありました。

図書館の普及課の仕事は、広報やイベント企画、学校支援と多岐にわたります。毎日、同じことをくり返すわけではなく、クリエイティブな面をもっており、計画性と創造性、そして新たなチャレンジも必要です。県としての図書館の存在意義、利用者から求められる図書館像、自分たちが作りたい図書館等々、いかにすり合わせをしながら方向性を見出すか、そしてどう仕掛けるかを考えることが楽しかった。

図書館での思い出話を少々。あるイベントにおいて、講師の先生が本題から逸れたお話をされる場面がありました。その話題の内容は世間的にも意見が割れており、公の場で私見として述べるのはいかがなものかといったものでした。現場にいた私どもは「あちゃ」と思い、お客様も違和感をもったのではないかと不安に思いました。

予想は、的中し、アンケートやメールにおいても、講師の話した内容について、疑問を感じる内容が届きました。主催側としては、反省しつつ、メール等にもていねいに返信させていただきました。言い訳にはなりますが、講師の先生がどういった話からどう展開するかなどは未知数ですし、知る由がありません。しかしながら、責任を感じ、お客様の意見を真摯に受け止めました。

そんな中、メールでやり取りした利用者A氏と他のイベント時にお会いし、直接話す機会を持つことができました。毎年期待して参加してくださったこと、急な展開に驚いたことなど率直なご意見をいただくことができました。「申し訳ありませんでした」と頭を下げることしかできませんでしたが、ぜひ、今後もいらしてくださいと伝えさせていただきました。

次のイベント時、会場を見渡してみる

と、A 氏の姿が見えました。私は生まれもった「図々しさ」をフルに活かしてA 氏に近づき、先日ご意見を聞かせていただいたお礼と、お越しいただいたことに対するうれしさを伝えさせていただきました。こうしてA 氏との交流が始まったわけです。

A 氏は多くのイベントにご参加いただいています。そして必ずアンケートを提出してくださいます。お会いすることが楽しみになるとともに、普及課職員も顔見知りになり、いろんな話もできるような関係を築くことができました。ある時、「課長さんの企画したイベントは来なくちゃね」と言われた時には、飛び上がるくらいうれしかったことを思い出します。A 氏はご自身をクレーマーと笑いながらおっしゃっていましたが、そんなことはまったくなく、ありがたいご意見を頂戴できることは図書館にとっても大いに意味があることなのです。私は心底、ステキなお客様に出会えたと感じております。A 氏から新年に職場へ届いた年賀状は、私の宝物です。

学校に話を戻すと、現在、学校はブラック企業、保護者対応に苦慮、不登校児童生徒数が記録更新、教師の療養休暇者も記録更新等、暗い話題ばかりが目立つ時代となっております。確かに「人」を扱う仕事は工場で同じ製品を作ることはまったく違う内容となっております。保護者も子供も生身の「生き物」であり、一筋縄ではいかない職場です。日本の将来を担う大切な子供たちを守り育てる現場が、いろいろと言われることは教員として辛いものもあり、現実を認めざるを得ないことも事実です。本来学校は、子供たちの笑顔と夢や希望に満ち溢れ、それを社会と学校が共有し、日本の宝としてみんなで育てていく場です。そこには自信と責任をもち、笑顔で元気な先生方の姿が必要だと感じています。

少子化が叫ばれている昨今、子供に深い愛情を注ぎ、大切に育てている保護者が増えているように感じます。その分、多くの保護者から相談や連絡があり、日々対応に追われていることも事実です。特に４-５月はクラス編成を行って間もないこともあり、クラス全体がなじむまでに時間を要します。保護者の相談に加え、主役である子供たちからの相談も増えていきます。

まさにここが「踏ん張りどころ」になります。各方面からの話をていねいに傾聴し、情報をつかみ、手立てを打つ。相談相手双方に納得感が出るまでしっかりと向き合う。そして、信頼される教職員、学校となり、保護者と協力体制のもと、子供たちを育てていく。しっかりとした関係づくりを行えば、その後がとてもうまくいきやすいということです。

「モンスターペアレント」という言葉が出てずいぶん時が経ちますが、今も昔もそんなに変わった気はしません。もちろん、理不尽な要求は飲めませんが、大概は子供を心配しての行動であることに違いありません。クレーマーでなく、熱心な保護者と考えればよいわけです。要は、その人を排除せず、受け入れることでうまくいく事例がたくさんあるということです。

私は昔から保護者が話をしたいというとき「どうぞどうぞ」というスタイルをとっています。（何を言いに来るのだろう、どう対処すればいいのだろう）と不安になるくらいなら、顔を見て、話を聞いて解決策を考えたほうが早くすっきりできるわけで

す。

結局は、「悩むくらいならすぐ行動」に尽きる気がします。あれやこれやと着地点を探し、台本を考えるくらいなら、直接膝を突き合わせて本音で話をする。これが一番ではないかと思います。おかげさまで学校でも、もち前の図々しさを発揮し、保護者の皆様とも楽しく笑顔で、そしてまじめに建設的な話をすることができています。

人ってホントに様々です。昔、先輩から「苦手な人ほど自分から近づけ」と教えられたことがありました。人が近寄りがたいくらいの人でも、話をすれば何か得るものがある、だから自分から関わっていけというアドバイスは本当だったと思います。今後の人生においても、図々しさを忘れず、コミュニケーションと笑顔を大切にしながら人との「交わり」を楽しんでいきたいと思います。

この通信紙の編集者であるＳ氏との出会いも思い出深いものがあります。数々の功績をお持ちになる氏との宴は、あたたかなおもてなしと新しい世界観を与えてくれます。現在も、私の図々しさで、酒を酌み交わせる関係にさせていただいております。Ｓ氏、心から感謝しております。

本校に設置した「茨城県立図書館」コーナー

子供たちと先生方が笑顔で輝く学校に！

特集 2 大きな足跡をたどる

読書に親しむということ

東大名誉教授、元日本宗教学会会長
世界平和アピール七人委員会委員
島薗進

最初に読書に親しむようになった時期

私が書物を読みふける時間をもつようになったのは十代の前半で、私の家族が東京から金沢に引っ越した後のことだ。引越しの旅は 1958 年の夏休みだったが、当時、上野から信越線で直江津を経由して北陸線に出る。蒸気機関車がまだ使われていて、駅弁を買うのが楽しみだった。時間は 10 時間とか 11 時間かかり、その後しばらくは東京に出るときは夜行寝台列車が多かった。当時の長距離列車は昼間なら景色を見るのは楽しいが、それでも時間を持て余す。まだ、スマホどころかカセットテープもない時代だ。時間つぶしには、本や雑誌、マンガを読むというのが自然だった。

私が金沢に住んだのは 8 年間だったが、その間、中学・高校ではバスケットボール部で過ごした時間が長かったし、勉強や恋愛に心を悩ませもしたが、読書に費やした時間も多かった。金沢市にはうつのみや書店、北国書林、福音館書店などがあって、高校生はよく友だちと書店で時間をつぶしていた。大人の雑誌をのぞくというのもあり、受験参考書を探すというのもあったが、文学書などの教養書に親しむ時間も少なくなかった。

学校の図書館もあり、父母が好んでいる書物を借りて読むというのもあった。世界文学全集、日本文学全集、岩波文庫、角川文庫、新潮文庫などというものがあり、読み始めるとおもしろくて読みふけるという時期があった。高校の国語の先生が、今は劇作家として知られる松田章一先生で、この先生に刺激されたこともあったようだ。高校 2 年の夏休みの宿題で自分の読書について報告せよというのがあり、「小林秀雄を 1 冊、たくさん読みました」と述べて、松田先生とクラスの皆に笑われたが、これは日本文学全集の「小林秀雄」の 1 冊を全部、読んだという意味だった。『ゴッホの手紙』とか『ドストエフスキーの生活』が入っていたかと思う。

大学進学とアイデンティティの混乱

高校 3 年に進学する 17 歳の春、これから 1 年は受験勉強に専念すると決めて、いっさい読書はしないことにした。そのとき、何か大事なことをやめたという意識があった。自分は何者であり、人生をどのように生きていくのかについて考えることと読書が結びついていたのだが、それをやめて当座の目標である、受験に集中するという選択をしたのだ。これは後に心に刺さった棘のようなものになった。ほんとうは真剣に取り組むべき人生の進む道について考えるのをやめて、「適当な答え」を選んだという負い目ができた。

幸か不幸か現役で大学入試に成功し、家族は大喜びだった。ふたりの祖父と父の歩んだ医学の道を歩むことになったのだ。ところが、大学へ通うようになって、当初か

ら自分はほんとうに医学を学びたいのか、という問いに取りつかれるようになった。それとベトナム戦争に対する疑問、東大の医学部の学生処分に対する疑問などから、学生のストライキに積極的に関わるようになった。そして、このまま医学部に進学するということは次第に考えられなくなっていく。これが 19 歳の頃のことであり、再び、読書に多くの時間を費やすようになった時期だった。

この時期の読書は、中学生高校生時代の読書を引き継ぐものだったが、一つ大きな転回があった。それは社会のなかで生きる自分という視点が加わったことだ。19 歳ごろに強い印象を受けた本の一つに、唐木順三の『現代史への試み』があった。この書物では、大正期以来の教養主義に欠けているものが厳しく指摘されているというのが私の読み方だった。これは高等教育で人間形成が行われ、科学を身につけた専門家となっていくことが、よい生き方の基盤だという前提を掘り崩すものと思われた。それは、戦争や社会問題で弱い立場の者が苦しむ社会のあり方や、自分が置かれている社会的地位といった問題に目を開かれるということと重なった。

進路の模索と読書

あまりまじめに出席はしなかった大学の授業から学んだこともあり、友人たちとのやりとりから刺激を受けたこともあった。哲学もいくらかは学んだが、それよりも社会学や社会科学といった領域があること、歴史的にものごとを見るというのも高校で習った歴史のような出来事や人名の記憶ではなく、今の人間のあり方を理解するためのものであること、これらが新しいことだった。

その一方で、文学に対する関心もかつてと比べて薄まったということはなかった。他方、医学を学ぶ基礎として必要な物理学や数学、化学や生物学には一向に興味がわかなかった。これは 17 歳の春に、読書はやめたと決めたことが、大事なことから逃げたことと意識され、あらためてしっかり自分の生きる道を考え直したいということとも重なった。「自分は何者か」というアイデンティティの問いがもっとも切迫したものになり、それに答えるための読書に熱が入ったのがこの時期だった。

実存哲学、フランクフルト学派、文化人類学、社会学、民俗学、文芸批評、精神分析などの諸分野とともに、世界文学、日本文学の書物は広く読み漁ったのは 19 歳から 22 歳ごろで、進学先を文学部の宗教学科に決め。さらに大学院にも進学した時期である。大学院に進学するということも確固たる信念や自信があってのことではなく、就職試験はいくつか受験したものの就職するふんぎりもつかなかったからだった。

当時の東大の宗教学の教員たちは、このような道に迷ってうろうろしているような若者をやわらかく受け止めてくれるようなところがあった。そこで、卒論では「フロイトと宗教」を、修論では折口信夫の思想をテーマに選んだ。高校の教員免許は国語で取ることにし、教育実習にも参加した。修論審査が終わって博士課程への進学が認められたのが 25 歳のときだが、そのときにできた学びの領域がその後の私の宗教学

の基盤ともなった。

学術研究と読書

その後、約 50 年の私の歩みを振り返ると、学術研究だけではない読書の時間を何とか確保し、学術を少しでも自由な読書に近づけようと努力してくる日々だったとまとめてしまいたくなる。学術研究を教育が仕事となったため、そのために研究書を読んだり、資料を読んだりする時間が多くなった。ほとんどそればかりをしていた時期もかなりある。だが、自由な読書の時間をもちたいという意識はときおり頭をもたげ、そのような時間をもとうとする努力は長く途切れることはなかった。

仕事のための研究書や資料を読むことと自由な読書をすることとはどこが違うのか。私自身は何者か、どう生きていくのかという問いはつねにある。学術研究や教育のために本や論文を読むことはそれとつながっているが、自己は何者かという問いにとっては少しか大きくかそれはさまざまだが、回り道をしているように感じる。その回り道は結局、自己は何者か、どう生きるのかという問いに関わってくるはずなのだが、迂遠に感じることがあるのは確かだ。

私自身の歩みのなかでは、教祖研究に集中していた 20 歳代後半から 30 歳代初めにかけては学術と自由な読書の間の開きが小さかった。やがて教育職に就職し、大学の科目を教えるようになると、自分自身に直接的に関心があることから離れていかざるをえない。私の場合、宗教学や日本文化論を教えるようになって、いい意味では幅を広げることとなったが、自由な読書は断念せざるをえないと感じる時期が続いた。

ところが、50 歳代に入って死生学という領域で仕事をするようになって、その距離が縮まってきた。これは意図的にそうした側面もあるし、経歴上、自ずからそうなったという側面もある。とにかく自由な読書に近いことが再びできるようになってきた。死生学関係の書物はそのようにして書いてきたものだ。古巣へ帰ってきたような気もする。

最近著は『死生観を問う』というものだが、これは「あなた自身の死生観を問う」という題で連載したものをまとめたものだ。『死生観を問う』というのは、私自身の死生観が問われているという自覚のもとに書いている。「まだまだ甘いですね。あなた自身の声が聞こえません」という声が聞こえそうだ。残された時間は短いが、もうしばらく精進したい。

島薗進『宗教学の名著 30』（ちくま新書, 2008）

言葉は魔術
ボランティアと国民負担率と

国際医療福祉大学大学院教授
元朝日新聞社論説委員
元大阪大学教授
大熊由紀子

言葉には魔力が秘められています。

1985 年、高齢化社会の先輩、５カ国を訪ねた私は、「寝たきり老人」という日常用語や行政用語がそれらの国にないことに驚きました。この言葉、概念は日本独特のものだったのでした。

日本だと老人病院や特別養護老人ホームに横たわっている人たちが(下記写真参照)、高齢化の先輩国では、ホームヘルパーや車いすの支援で、お洒落して外出し、家族がいなくても自宅で暮らし続けていました(右記写真参照)。

老人病院や特別養護老人ホームに横たわっている人たち(大熊由紀子先生提供写真)

ホームヘルパーや車いすの支援で、お洒落して外出など(大熊由紀子先生提供写真)

日本で「寝たきり老人」と呼ばれている人たちは、「寝かせきり」にされ、廃用症候群におちいった犠牲者だった、という「朝日新聞」のキュンペーンは、「寝たきり老人ゼロ作戦」と「介護保険制度の策定」につながっていきました。

政策を誤らせる魔術的な言葉は、いくつもあります。

たとえば、「特別養護老人ホーム待機者〇〇万人」という役所の発表。

本人は自宅で暮らしたいと思っており「待機」などしていない、と現場を知っている誰もが言えます。ところが、「待機者 42 万人」というミダシが新聞にあふれると、「施設を倍増しなければ」「ひと部屋に何人も入れなければ」と思いつく、軽率な政治家や自治体職員がでてきます。

不足しているのは、ケアをする人材やそ

の待遇なのに、ハコを増やしたり詰め込んだりすれば解決すると錯覚してしまうのです。もしもこの 42 万人を「在宅支援が不足したための被害者の数」と呼べば、自宅で暮らし続けたいという、本人の願いをかなえる仕組みや人材の重要さに人々が気づくと思います

政策を誤らせる役所言葉の横綱は「国民負担率」です。

大蔵省が作った日本独特の言葉で 1982 年から新聞に頻繁に登場するようになりました。この国民負担率は、租税・社会保障費が国民所得に占める割合とされ、臨調で「50%よりかなり低位に留めること」と定められました。名前は「国民」ですが、医療・介護の自己負担、子どもの教育や老後に備えての貯金、民間保険、ローンなどの実質的な「国民の負担」が含まれていないとい手品のタネが隠されています。

「国民負担率」という言葉の第二の手品のタネは、「負担」という人の心に嫌悪感を引き起こす言葉です。その結果、教育や子育て、医療や福祉の財源が、先進諸国と比べてひどく低く押さえられました。国の借金も諸外国に比べてケタ違いに増えています。

「寝たきり老人」という言葉がない国々では「税金にはゴム紐がついていて、必ず戻ってくる」といわれているのとは対照的です。

「税金が高い北欧では人は働く気にならず、経済は傾く」というのも「作られた神話」でした。貿易収支も財政も幸福度も出生率も日本より高いのです。

言葉の魔術から人々に目覚めてほしくて「国民支えあい率」「国民連帯率」「公的負担率」という言葉を考えて紙面で提案しました。社会保障審議会の隅田三喜男会長が共感して、「国民負担率」という言葉を答申で使わず、その代わりに「公的負担率」を使ってくださいました。でも、三つとも、流行りませんでした。

私が考えて新聞で広め、流行った言葉もあります。善玉コレステロール。もしも「特許」がとれていたら、大金持ちになったかもしれません。

退治した言葉もあります。「終末期」です。そのように言われたら、死期が近づいたご本人はどのような気持ちかしらと考え、厚生労働省の終末期医療の検討会でくり返し主張しました。頑張ったかいがあって、厚労省は「人生最終段階の医療と福祉」に変えてくれました。すると自治体までこのことばを使うようになりました。これを一歩すすめてくださったお医者さんがいます。滋賀県東近江市で在宅医療を実践する花戸貴司さんの「人生の最終章」です。終末期より、ずっと素敵だと思いになりませんか。

最後にボランティアについて。

「ボランティアでお願いします」は、日本ではふつう「タダでやってね」という意味です。でも、英語のボランティア、北欧語のフリヴィリには「無料で」という意味はまったくありません。

語源はラテン語のウォロ(Volo)。喜んで○○をする」「志す」という意味です。「いやいや○○をする」という(Nolo)と対になっていて、ウォロには、命令形がないのだそうです。

ボランティアの「ボル」は火山を意味するボルケイノと同じで、中から噴き出してき

て、止めようとしても止められない思いをあらわしているといわれます。

私の大阪大学での所属は、ボランティア人間科学講座です。そして、いま、おさえきれない思いで、福祉と医療・現場と政策をつなぐ「えにしネット」の志の縁結び係をしています。

フラクタルは隠れた暗号か？

元日本原子力研究所職員
山本俊弘

フラクタルとは「同じような図形がくり返し現れる図形」であって、図形の部分と全体が自己相似（再帰）になっているものです。つまり、小さな部分が全体と似た形をしている特性を持っています。フラクタルは無限に細かい構造を持ちます。どれだけ拡大しても新たな詳細が現れるのが特徴です。数学者ブノア・マンデルブロ博士(1924-2010)が創始者とされています。フラクタルは自然界の様々な場面に現れます。歯朶(シダ)の葉、稲妻、雲、雪の結晶、銀河、海岸線、乱流、人体の肺、血管構造等々です。

創成論者のジェイソン・ライル博士は、数学の存在を実在論的に考え、数学は人類の思考によって生まれたものではなく、予め宇宙にビルトインされていたものを人類が見つけただけだと主張し、フラクタルは創造者による隠れた暗号であると考えます。そして、無神論者には、このフラクタルの出現根拠が説明できないとし、無神論を貫くのならフラクタルは見ないほうがいいとまで主張します。その理由は以下のとおりです。

フラクタルの美しさと秩序：フラクタルには驚嘆すべき美しい芸術が隠されています。フラクタルの複雑で美しいパターンが偶然に生じることは不可能で、それらは知的な設計者によって創造されたものです。自然界に見られるフラクタルのパターンが創造者の存在を証明するものであると考えるべきではないでしょうか？

数学とフラクタル：数学は創造者による創造の秩序を反映しています。フラクタルは数学的な概念であり、その背後には高度な知性が必要であって、フラクタルの存在は創造者が世界を秩序立てて創造したことの証拠ではないでしょうか。

フラクタルの普遍性：フラクタルは自然界のさまざまな場所に現れます。これは、創造者が全ての創造物に対して一貫したデザインを用いている証拠ではないでしょうか。木の枝、山の輪郭、雪の結晶など、自然界に広がるフラクタルは、創造者による創造の一部として見ることができるのではないでしょうか。

参考図書

Jason Lisle “Fractals：The secret code of creation” Master books 2021.
茨城県立図書館所蔵の参考図書
オリバー・リントン著　駒田曜訳「フラクタル 混沌と秩序のあいだに生まれる美しい図形」（アルケミスト双書、2021）。

下はマイケル・バーンズリー博士が

$$\begin{pmatrix} x_{n+1} \\ y_{n+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_n \\ y_n \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} e \\ f \end{pmatrix}$$

の式を使って再現した歯朶のフラクタル図形。

編集後記

通信紙 No.76 は、No.75 の内容に対応するように、昨年度に茨城県立図書館ボランティアに加入した 8 人に対し、写真付きの自己紹介の原稿依頼をしたところ、いくつかの理由から、残念なことに、実現できませんでしたが、引き続き、考えたいと思います。

No.76 は、私が、過去に、やり取りした知り合いの中で、考え方が素直で、建設的で、興味深い問題提起のできる 4 人の識者に対し、心に浮かんだキラリと光ったことなどを自由な形式にまとめていただきました。

私は、今回、大変、稀なことですが、すべての原稿に対し、句読点や用語の使い方など、著者の判断を尊重し、そのままにしました。

鈴木先生は、小学校教諭、茨城県立図書館に出向(普及課長)後、茨城県坂東市岩井第一小学校校長として、社会貢献しており、とにかく明るく、プラス思考で、世の中のお手本になるような言動です。

島薗先生は、日本を代表する著名な識者であり、社会的業績は、数えきれないほど多く、著作は、単著 28 冊、共編著 36 冊、翻訳書 1 冊(茨城県立図書館には単著だけでも 21 冊閲覧可能)であり、私の宗教学の先生です。私が、島薗先生に対し、強い印象を持っていることは、「政府脳死臨調」の委員であったこと、社会問題に対し、常に、未来を拓く建設的な意見を述べていること、研究対象の取り扱い方が、公正であること、たとえば、宗教を論じる場合、伝統的な大きな宗派でも、社会的には、評価されない、それどころか、良くない意味で話題になったことのある新興宗教でも、すべて、同じ文量で述べていることであり、私は、そのことに気づき、自身の誤りに気づき、同様な手法を身に着けたいと思うようになりました。私は、今回の島薗先生の原稿を読み、成長期の読書におけるいちばん大切なことは、考え、迷い、試行錯誤することと受け止めました。

大熊先生は、日本の長い男社会の歴史の中で、日本初の女性論説委員(朝日新聞社、論説委員 18 年間、医療・福祉・科学分野担当)という歴史的偉業を達成した日本を代表する著名な識者です。社会的業績は、数えきれないほど多く、著作は、単著 6 冊、共編著 7 冊(茨城県立図書館には単著だけでも 6 冊閲覧可能)であり、朝日新聞社定年後、大阪大学教授、そして、現在、国際医療福祉大学大学院教授(83 歳)です。大熊先生の際立った誰も達成できなかった社会的業績は、医療・社会福祉の推進であり、医療・社会福祉研究者や病院・省庁関係者などからなる「えにし」(http://www.yuki-enishi.com/)と言う世界に数千人の組織のまとめ役であり、情報発信者(頻繁にメルマガ発信)です。私は、医療・福祉分野、特に、薬害や医療事故などについて、大熊先生から多くのことを学びました。

山本先生は、私の共同研究者であり、原研での実験や計算、日本原子力学会研究専門委員会での貢献が大きく、社会的業績をすべて記したならば、一冊の著書にでき、公平性を維持するため、共同研究者については、この程度の控えめな記載にしたい。

桜井　淳